

尋常小學校讀本

倉知新吾編輯

六

檢定申請

K120.8
50
6

K120.8

50

6

倉知新吾編輯

尋常小學校讀本

益智館同梓
古香堂

尋常小學校讀本卷六

第一課

伊藤東涯の話

伊藤東涯といふ學者あり、或る日京都三條町を通りて、小きふくろを拾ひ、ときて見しに、金拾兩餘ありけり。東涯まゆをひそめ、こは遺主お返へりたきも

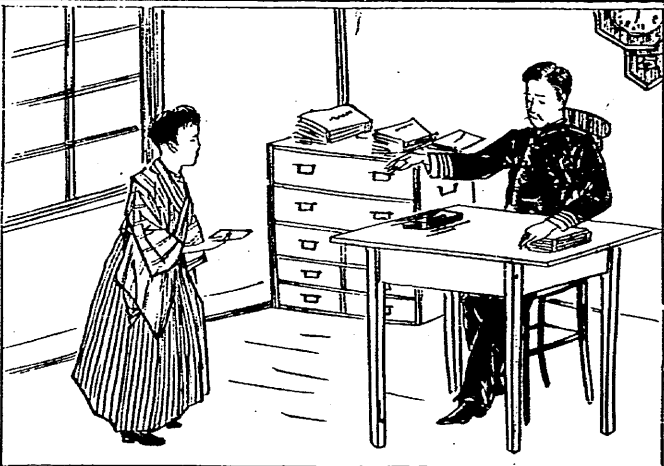
三行の遺言書
巻六
のかあとて、や、久しく其處ふ立ちて、
遺主の尋ね來るを、待居けるに、日もた
や暮れんとしたまむ、已むを得む、家ふ
歸りて、之を神棚ふ上げ置きたり。其後
も、心ふおけて、遺主を尋ねけれども、終
ふ逢むざりしかむ、其金を、伊勢の
太神宮ふ、納め奉れりと云ふ。

拾遺主返已逢納

第二課

拾ひものゝ届

加納正一といふ子は、お久といふ妹を
伴ひて、叔母の家よりもど里へが、途ふ
て、お久も、紙入の遺ちた物を拾ひて、其
中を見しに、少しむかまじ紙幣ありた
り。お久は、これを正一に見せて、兄さん、
どうしませうと云へば、正一も、はやく



届出づべきものなれば、正一よ、それを

うちへ歸つて、おつか
さんよ、相談しませう
とて、兩人は、急ぎ家に
歸り、直に母ふ紙入を
見せ、この事を話した
り。

母は、拾ひものを、直に

持つて、警察署へ行いて、差出し、警察署
みて、拾うた場所や、れまへ、又、れとつ
さんの名前や、うちの番地を問は、
時、一々答へると、教へた。

正一は、かまこまりましたとて、直に警
察署へ行き、かまかと届けて、歸れりとぞ。

叔母 急 警察署 差出

第三課

缺席届

正一は暑氣にあてられて、病氣とあり、
學校へ出席をること、能はざる様ふな
りけれども、左の届書をじたく、免妹の托
久に持たせて、教師へ差出だせり。

缺席届

私病氣よて兩三日出席いたしか
ね、此段届申上げ也

八月二十日

加納正一

伊藤直道殿

かくて、正一も三日を経て更にまた、缺
席届を差出したれむ、教師も、同級の生
徒に、正一の病氣を話して、みまひ状を
作し、おくらせたり。

此病氣よて先日より缺席なされ
ゆよし先生よりうけたまわりの

せつかくは養生あそびされ早く
は出席の様祈り申す

八月三十日 尋常三年生一同

加納正一様

申 級 状 祈

第四課

都會

都會ハ人口多ケレバ、戸數モ亦多ク、百

貨ツドヒ集リ、商賣繁昌ニテ、人ノ往來
ハゲシクイトニギヤカナリ。

我が國ニテ、最モ大ナル都會ハ、東京ニ
シテ、之ニ次グモノヲ、京都、大阪トス。東
京、京都、大阪ヲ稱シテ、三府ト云フ。其他、
名古屋、横濱、神戸、金澤、廣嶋、仙臺等モ、皆
名高キ都會ナリ。

集 繁昌 往來 府

第五課

郵便 一

手紙を人に送らんふ、若し一々使に持たせて、やらねむからぬ時ハ、其不便、如何むかりぞ。されバ幸ふ、郵便とて、我等の手紙を送るふ、最も都合よき法あり。手紙を郵便にて、送らんふハ、其上袋の表に、先方の宿所、名宛を志た、免其下

又は裏に、自分の宿所、名前を書き、文字にか、らぬ様に、切手を貼り、之を郵便局、又ハ街道にそあへたる郵便箱に、入れ置くべし。然るとき、速に先方へと



どくなり。

何市何區何町何丁目何番地

表 何 某 様

切手

何縣何郡何村字何番地

裏 封 何 某 様

郵便は、手紙に限らば、新聞紙或は書物などを送達せるものなり。

郵便物の目方が増えに従ひて、切手を多く用ふ。切手ふハ、一錢、二錢、四錢、八錢等の種類あり。二錢のもの二枚をえるべきに、四錢のもの一枚を用ひ、又八錢のふた、四錢二枚ふても、二錢四枚よても、用ふはことを得。はまり其目方に應

トたは金高の切手を用ふれど、宜と知るべし。

法 袋 宿所 名宛 裏表局
街道 限 從 應

第六課

郵便 二

又一枚の厚き紙ふて、其裏に用事を書き、表に先方と自分との宿所名前を認

免上袋を用ひむして、直に配達するものあり。之を郵便はかきと云ふ。

何縣何郡何町字何

何縣何市何町何番地

何 某

何 某 様

表



郵便はかき

此表面より宿所姓名を限り認むべし

はがきの表面の左の肩ふ、印あり。此印をけがさぬ様、注意をべし。
はがきふを、一錢のものと、二錢のとあり。二錢のも、往復はがきといひて、二枚ついきあり。其發信用と、記せる一枚へ、用事を認めて、送函と記す、先方の人、之をきりはなし、返信用と、記せる他の一枚へ、返事をかきて、此方へ送るなり。

厚 認 肩 印 記

第七課

鹿ヲトリニガシ、男

昔、或ル男、鹿ヲトラントテ、ワナヲ掛ケテ、待チ設ケタルニ、大ナル鹿、一足カレリ。男喜ビテ、捕ヘントシタリシガ、マテヨ、ワナニテ、捕ヘタリト云ヒテハ、オモシロカラズ。弓ニテ、射トメタリト、語

リ誇ラントテ、弓ニ矢
ツガヒ、シカト、子ラヒ
テ放チシニ、其矢ワナ
ノ緒ヲ、フツト、射切り
タレバ、鹿ハ忽チ逃ゲ
去レリ。
男ハ、口ヲヒラキ、持チ
タル弓ヲトリ落スバ



カリ、本意ナク思ヒテ、鹿ノ走りシ方ヲ
シバシナガメタリトゾ。

昔 語 誇 緒 忽

第八課

商人

商人ハ、常ニ種々ノ品物ヲ仕入レテ、之
ヲ諸人ニ賣渡スヲ業トセリ。若シ商人
ナクバ、日常ノ物品ヲモ、容易ニ得ルコ

ト能ハザルベシ。

凡テ商人ニハ心得ベキコト多ケレドモ、能ク品物ヲ吟味シ、正直ニ働キ、客ヲ大切ニスルコト、最モ肝要ナリ。カヽレバ、次第ニ信用ヲ得、其店益繁昌ス。若シ粗末ナル物品ヲ賣リ、屢約束ヲ違フル事アルトキハ、信用ヲ失フニ至ルヘシ。諸人 約束 違 失 吟味

第九課

手紙

松太郎ハ、商賣ノ用ニテ、父ニ從ヒ、大坂へ、出發セシガ、ヤガテ彼地ニ著キテ直ニ母ノモトへ、郵便ハガキヲ送レリ。其文ハ左ノ通りナリ。

今月六日大坂小着き表書の所
み止宿仕り外父と様をト宛私

も無事に在座の外ゆるぎ在安心下
さ味づくの外以上

月日

松吉郎

母上様

此松太郎ニハ竹次郎ト云ス一人ノ弟
アリ。母ト共ニ留守居シテ店ノ事ドモ
手傳シタリシガ母ノ言附ニテ左ノ返
事ヲ認メテ送レリ。

大坂へ在安着あそむされ外よ
し承り安心仕り外此方も皆無
事に外故在氣ふかけ下さるま
志く外やがて在用ずみの上在
帰りの程待ちたてまつり外

月日

竹次郎

父上様
兄上様

私 留守居 言附 承

第十課

徳川光圀の話

徳川光圀も大名ふて何りーが、人より送られたる、手紙の端の白き處をむ、一切取りて、つぎ合もせ、それを自分の手紙や、作文の志たがきなどに用ひた

又召仕の女どもの、紙を粗末にまゐるを戒めーかど、尚ほ其くせ止まざりし故、或る日、其女どもを召連れ、紙をき場へ行きて、之を見せたり。女どもは、紙をく人の水の中に、手足をさらして、冷におごはながら、働き居けるを見て、始免て其骨折の、容易あらぬを思ひ、それより後、むだふ紙を費さゞりーとぞ。

端 召仕 粗末 戒 連 冷
骨折

第十一課

柿

柿ハ、九月頃ニ至リ、漸ク熟ス。凡テシブ味ヲ帯ベリ。サレド、其中稍、色ヅキテ、木ニアリナガラ、シブ味ノヌケルモノアリ。之ヲキザハシト云フ。好キ菓物ナリ。



又赤ク柔ニナラザレバ、シブ味ノヌケザルモノアリ。之ヲシブ柿ト云フ。シブ柿モ、亦甚ダ功用アリ。シブ柿ノ、未ダ柔ニナラザルモノヲ、酒樽ニ入レ置クトキ

ハ、酒氣ノタメニ、シブ味又ケテ、甘クナル之ヲタルヌキト云フ。

又其皮ヲムキテ、二十日餘、日ニ干シタルモノヲ、アマボシト云フ。此アマボシヲ、尚ホ四十日間モ、干シテ後、新ワラト共ニ、瓶ニツメ合セテ、封ジ置クトキハ、一面ニ白キ粉ヲ吹キ出ダス。之ヲコロコト云フ。

青クシテシブノ多キ柿ヲクダキテ、シブ汁ヲシボリ取ル。シブハ、物ノクサリヲ防グモノナルヲモテ、之ヲ器物ニ又ルトキハ、能ク久シキニタフ。又紙ニヒクトキハ、能クシメリヲ防グ。故ニ敷紙、包紙ナドニ用フルナリ。

切 酒樽 柔 甘 瓶 汁
敷紙 包紙

第十三課

植物ノ功用

植物ニハ、穀物、野菜、菓實ノ如ク、我等ノ食物トナルモノアリ。木綿、麻ナドノ如ク、衣服ノ料トナルモアリ。松、杉、セノキ等ノ如ク、家屋ノ材トナルモアリ。或ハ、種々ノ器物ヲ造リ、或ハ、薪、炭トナスベシ。其他、病ヲ治ムル藥種トナリ、眼ヲナ

グサムル盆栽トナリ、或ハ、家畜ノ食料トナル。

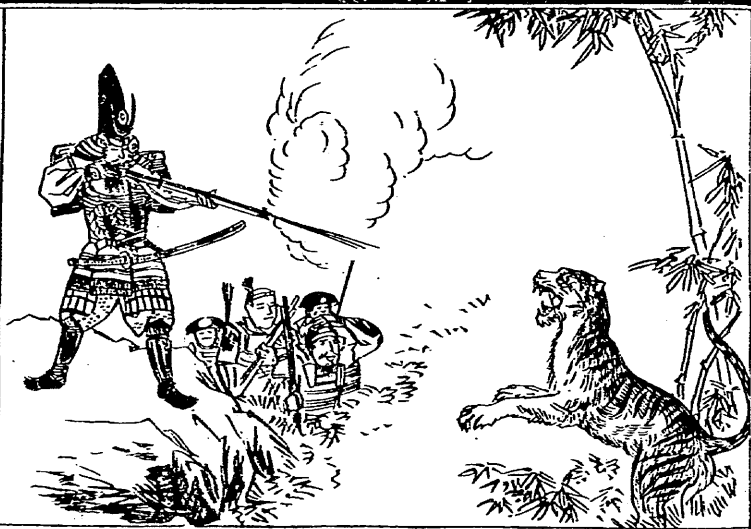
又世ニ、四木ト稱シテ、甚ダ重要ナル植物アリ。即チ蠶ノ食トナル桑、人ノ飲料トナル茶、紙ヲ製スルカウゾ、ウルシヲ採ルウルシノ木、是ナリ。

眼 盆栽 家畜 重要 採

第十三課

清正虎をうた

加藤清正ハ、武勇からびなき大將なり
き。朝鮮征伐の時、清正或る山のふもと
ふ、ぢんどりせし、其夜虎出來て、馬
を食ひ、人をさへ食ひ殺せり。清正大に
怒り、ふくき畜生かかとして、夜の明くる
を待ち、兵士をげぢりて、虎がりを始免
た。と。



兵士も、何れも勇み
て、とれたの聲をあげ、
たひく山中ふ入
りし、ふき、原ざを
ざをと音して、一足
の大虎、牙をあらし、
あらをれ出でたり。
清正之を見て、たの

走といひさままたち向へむ、虎も、清正を
目がけて、をどり來れり。然るに、清正少
しもさまが、び、大なる岩の上より、鐵砲
みて、之をねらへむ、虎も、しむし立止ま
りて、清正をふら免り。

兵士どもも、清正にあやまちもやある
らんと、つゝ、さきをそるへ、虎をうたん
とを、恠、清正目くむせし、てうたせむ。

さる程に、虎も、一聲高くほびて、疾風の
如く走り、をどりかゝらんと、走るを、清
正をかさず、鐵砲きつて放し、に、其た
ま、虎の口よりのど深く打込みたを、む
さまがの虎も、其處ふたふれて、死しけ
る。此働を見しもの、清正の武勇に、感ぜ
ざ、涙をなかりき。

或人、清正に、何故、早く火ぶたをきらざ

りいかと問ひしに、遠きにあるをうた
むうち損むる事もあらんと思ひ、手許
近くひきよせしありと答へたりとぞ。

武勇 大將 征伐 殺 牙 岩

鐵砲 損

第十四課

菊

秋の末、干草の霜にあひて、半枯れたる

ころ、菊も盛み咲きにほふ。

菊の花の形と色と、種々よして、數へ
がたし。かく種類
の多きを、種子を
まきて、つくりし
ふよるならん。ま
べて實生ハ、新奇
あるものを生だ



とぞ。

菊の莖も、其年の中に枯るれど、其根も、
枯るゝことなく、翌春ふ新芽を出だし、
秋ふ至りて、再び花咲くあり。

霜 咲 新竒 翌春

第十五課

勉強ノ功

如何ナル難キ事モ、撓マズ、折レズ、歲月

ヲ重子テ、勵ミ行カバ、遂ニハナドカ成
就セザルベキ。

愚ナリトテ、自ラ棄ツベカラズ。愚ナル
モノモ、勉メテ學ビ、怠リナク習ヒ、歲月
ヲ重子ナバ、イカデカ、人ニマサルコト
モ、成シ得ザルベキ。

貪シトテ、ナゲクコトナカレ。絶間ナク
働キ、ツヰマヤカニ暮シ、カクテ歲月ヲ

重子ナバヤガテ富貴ノ身トモナルベシ。

若シ學バス勉メズバ易キ事モ成リ難ク賢キモノモ人ニ後レ富メルモノモ終ニ貧シクナルベシ。サレバ人々勉強ノ功ヲ積ムコソ肝要ナレ。

夫々ろをこ絶つゝはゆまをれ
ばと一はたまたびてたゆまを

ゆけ。

まふ笑みおきいでひぐあま
でと一つたはとめてはたらき
ゆき。

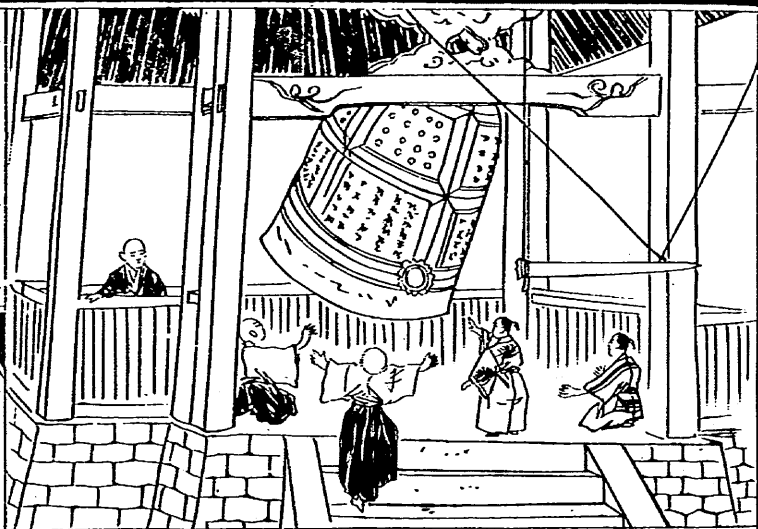
まなべばそ乃みのひの里あま
志のせげむそれみのさのえを
なす。

難 撓 愚 棄 怠 積

第十六課

多聞丸鐘を動かす

昔多聞丸と云ふ童子あり、奈良の東大寺ふ入りて、學問しけり。此寺ふ、高さ二間、口の目たり一間餘の鐘あり。或る時寺の僧ども、鐘堂の傍ふて、如何なる大かふても、此鐘を動かさざること、かあふまじと、語らへ、海を聞きて、多聞丸は、う



ち笑ひながら、夜分まで待たれなむ、動かして、見せまゐらせんと云ふ。皆々まゐると、は、思わざりしかども、いざ動かしてよと、たをふれたり。

さて多聞丸も、直に下男を呼び寄せ、汝
今より、此鐘を指の先ふて、絶間あくつ
けと命じたり。下男も、あゝこまりて、命
の如くなせども、一向に動くけしきあ
らざりき。

然るに、夜半頃に至り、鐘の里うづのあ
たり、ぎり／＼と鳴りかゝりたれむ、下
男も、之に力を得て、尚ほつく程に、少し
づゝ、ゆり初免、つくに従ひて、まほ／＼
強く動きたり。

多聞丸も、望の遂げしを喜び、自ら下男
ふ代りて、之を動かし、前の僧どもを呼
むゝめて、此體を見せしむ、皆々大に
驚きて、多聞丸の才智み、感ぜざるをな
かりき。

多聞丸とい、我が國の忠臣と、稱せらる

る、楠正成公の幼名なり。

童子 僧 堂 傍 笑 寄 命

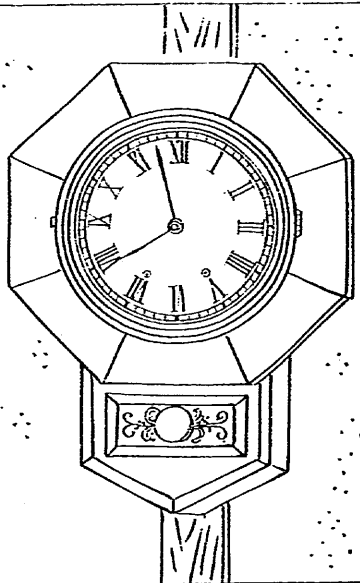
鳴 望 才智 忠臣

第十七課

時計

時計ノ面ノ周圍ニ、書キナラベタルハ、
ろうま數字ニテ、一ヨリ十二マデナリ。
又長キ針ト、短キ針トアリテ、絶エズ廻

リ、周圍ノ文字ヲ指シテ、我等ニ時ヲ示
スナリ。



長短二本ノ針ノ
重ナリテ、其端ガ
XIIヲ指ストキハ、
十二時ナリ。短針
ガIヲ指シ、長針
ガXIIヲ指ストキ

ハ、一時ナリ。又長針ガⅫヲ指シ、短針ガⅡヲ指セバ、二時、Ⅲヲ指セバ、三時ナリ。其他ハ推シテ知ルベシ。

短針ガ數字ヨリ數字ニ移ル間ハ、一時間ニシテ、ソガ一廻リセバ、十二時ナリ。又長針ガ數字ヨリ數字ニ移ル間ハ、五分ニシテ、ソガ一廻リセバ、一時間ナリ。故ニ一時間ハ、五分ノ十二倍ニシテ、六

十分ニ當ルナリ。

一晝夜ハ、二十四時ニシテ、夜ノ十二時ヨリ、晝ノ十二時マデヲ、午前ト云ヒ、晝ノ十二時ヨリ、夜ノ十二時マデヲ、午後ト云フ。サレバ、時ヲ數フルニハ、午前何時何分、午後何時何分ト呼ブナリ。

周圍 推 移 倍 午 呼

第十八課

冬

昨夜より、降り續きたる雪は、屋根ふも、木ふも、積もりかゝり、見渡を限り、眞白ふかれり。

三人の子供も、雪の球を作りて、地上を轉むし行く。球は杞ひく雪をつけそへて、やがて動かぬ様になるべし。

雪の降り積もるときは、甚だ重くあり

て、木の枝を折り、幹をさくことあり。之を雪折と云ふ。時として、家などさへも、積雪のた免に、つぶるゝことあり。又雪の稍、解けかゝると、路傍の山などよ



り、くづれたちて、旅人をうづむことも
あり。之をあだれと云ふ。

續 眞白 轉 幹 解 旅

第十九課

金屬ノ重ナル物

金、銀、銅、鐵ノ功用ハ、既ニ説キタレバ、此
ニハ、錫、鉛、トタン、水銀ノ功用ヲ語ラン。
錫ハ、其色銀ニ似テ、薄黒ク、クモリ易シ。

其質銀ヨリモ柔カナリ。茶ツボ、サカツ
キ等ヲ造リ、又銅ニ和シテ、カラカ子ト
ナシ、火鉢、花イケ、鐘ナドヲ造ル。ブリツ
キハ、鐵板ニ、錫ヲ塗リタルモノナリ。
鉛ハ、錫ニ似テ、目方稍、重ク、其質錫ヨリ
モ柔カニシテ、火ニトケ易シ。オモリ、鐵
砲、ダマナドニ用フ。
トタンハ、錫、鉛ヨリモ堅クシテ、其色亦

銀ニ似タリ。銅ニ和シテ、シンチウトナ
シ、烟管、火鉢、佛具等ヲ造ル。トタン板ニ
テ、屋根ヲフキ、トヒヲ造レルハ、我等ノ
マ、見ル所ナリ。
水銀ハ、色銀ノ如クナレドモ、カタマリ
テ居ラズ、水ノ如ク流レ動クモノナリ。
之ヲ盆ナドノ上ニ、落ストキハ、細カナ
ル粒トナリテ、散リミダル、コト、恰モ、

ハスノ葉ニカケシ水ノ如シ。ガラスノ
裏ニツケテ、鏡ヲ造ル。又寒暖計ノ細キ
管ニ、水銀ヲ入レタルハ、人々ノ能ク知
ル所ナルベシ。

既 說 錫 鉛 質 和 火鉢
塗 烟管 佛 粒 散 恰 鏡

第二十課

小川泰山



小川泰山も、幼より山
本北山の弟子となり
しが、勉學の心厚くし
て、風雨烈しき日とい
へども、かつて怠るこ
となかりき。
或る歳の冬、大に雪降
るが一日、泰山も、常

のごとく、師の家に行かんとせしに、頻
み降り續ける雪の、笠の上み積もりた
まき、泰山も、其重さに堪へかねて、たま
づき倒れ、大にひざをいた免たり。行き
かふ人々、之を見て、扶け起し、家み歸ら
んことを、勸免し、かど、泰山も、まかどし
て、其いたみを忍び、遂み師の家み至り
て、業を受けたりき。此時泰山、僅に十歳

ありと云ふ。

烈 頻 倒 扶 勸 忍 僅

第二十一課

紀元節

二月十一日ハ紀元節ナリ。此日ハ家々ニ國旗ヲカ、ゲテ祝ヒ奉リ。又我々ノ學校ニモ、祝シ式ヲ行ヘリ。紀元節トハ、如何ナル日ゾ。我が國第一代ノミカ

ドニ、マシマセル 神武天皇ノ御位ニ即カセタマヒシ日ナリ。

此 ミカドハ、カシコクモ、我が國ヲ建テタマヒシニ、オハシマセバ、我々臣民ハ、其御イサヲシヲオモヒテ、祝ヒ奉ルベキナリ。

式位民

第二十二課

神武天皇

神武天皇も、天照太神五世の御孫お
れをしましき。初免日向の國たかちほ
の宮ふいまゝ、が其時西國をはや
天皇お従ひ奉りしも、東國ハ未だ従ひ
奉らぬものども多かりけり。
されバ 天皇も此ものどもを平げ都
を中國お定免んとて、多くの軍勢を引



連れ日向の國を出
で立ちたまへり。
あくて數多の國々
を経て、大和に入り、
ながさねひま、やそ
たけるあどいへる
賊をうちほろぼし、
悉く中國を平げて

遂ふ大和のうねび山の東南あるかし
をらの宮にて御位ふ即かせたまへり。
これより代々の 天皇其後をつがせ
たまひ、今上天皇ふ至り百二十一代
とはなりぬ。

孫 定 軍 賊 悉

第二十三課

空氣

我等走ル時ハ目ニ見エザレドモ自ラ
身ニ觸ル、モノアルヲ覺ユ。又扇子ヲ
ツカフトキハ、風ヲ生ズルヲ知ル。是レ
我等ノ周圍ニハ、常ニ空氣ノ充滿セル
ニヨレリ。
我等ハ、常ニ空氣ヲ呼吸ス。空氣ハ、我等
ニシバラクモ、缺クベカラザルモノナ
リ。

サレド、我等が、一度呼吸シタルモノハ、再ビ吸フベカラズ。之ヲ吸ハミ害アリ。故ニ人多ク集リタル所ナドニハ、久シク居ルベカラズ。若シ我等ノ室ニテ、呼キタル氣ノ、コモレルヲ知ラバ、速ニ窓ヲ開キテ、新シキ空氣ト入レ換フベシ。觸 扇子 充滿 呼吸 窓 換 尋常小學校讀本卷六終

明治二十五年九月廿八日印刷

同 年十月十日出版

定價金八錢

石川縣金澤市片町五十六番地三

編輯兼 倉知新吾

同縣同市安江町十番地

發行者 近田太三郎

同縣同市上近江町四番地

印刷者 廣瀨與作

發行所 益智館

同 同市安江町 古香堂

